

農業気象技術対策資料

農作物の寒害・雪害対策資料

平成 26 年 12 月 16 日（火）

愛媛県農林水産部農産園芸課農業振興局農産園芸課

1 果 樹

柑橘類では現在、収穫途中にあり、積雪による果皮障害の発生や低温による果実の凍害(一般に -3°C が7時間以上続くとス上がりの恐れあり)の発生が懸念される。また、伊予柑等では、降雨後の寒風による果皮障害の発生に注意が必要である。

そのため、週間天気予報の降雪と最低気温予想には特に留意し、積雪や氷点下が予想される場合は収穫を早め、庫内温度の保温に努める。

(1) 早期収穫と果実保護(袋)

ア 収穫期に達している温州ミカン(袋掛け等を実施していない完熟栽培園を含む)、ポンカン、伊予柑等は、樹冠外周部の果実から早めに収穫する。

イ 越冬栽培を行う不知火、清見、せとか、甘平や日向夏などは、寒害と鳥害防止のために袋掛けを行う。袋の種類には、紙袋やサンテ等があり、紙袋は果実の保護に効果的だが手間がかかる。標高が高い園地等寒害の受けやすい園地では二重袋とする。サンテは省力的だが、寒風や降雨による果皮障害の防止効果はない。目的や品種による使い分けが必要である。せとか、甘平等では、着色後に退色防止の黒サンテを用いるのが一般的である。カラ(南津海)のように果数が多い品種ではネットや不織布などで樹冠全体を被覆し、果実の保護に努める(防風、鳥害回避効果)。

(2) 厳選出荷

積雪や低温等で果皮障害やス上がりの恐れのある園では、区分採取、区分貯蔵を行う。

収穫した果実はしっかり予措を行い、腐敗果等の不良果実は選果して取り除く。

庭先選別を徹底し、不良果実を混入しないように厳選出荷に努めるとともに、商品性のない果実は、加工原料等とする。

(3) 貯蔵果実の保護

ア 軒下で予措中の果実は、寒波襲来前に屋内に搬入する。

イ 貯蔵庫は、窓や換気口を閉め、断熱材を張るなどして防寒・保温する。

(4) 樹体の保護

ア 積雪による枝裂けを防ぐため、高接樹は支柱を立てて結束するとともに、接ぎ木部も結束して補強する。また、越冬後収穫する柑橘類は、支柱を立て、枝をつり上げる等の対策を行い、被害防止に努める。

イ 積雪による枝裂けが予想される場合は、早めに雪はらいを行う。

ウ 季節風の強い所や冷気の停滞する所では、コモや不織布などで樹体を保護する。

エ 寒風を防ぐため、防風垣や防風ネットを設置し、冷気の停滞する園地の防風垣は下枝を刈り取り、空気の流れをよくする。

(5) 施設対策

ア 被覆資材の破れや隙間部を点検し、補修やバンドの締め直し等により、保温効果を高める。

イ 積雪に備え、パイプの腐食箇所の取り替え、継ぎ手の締め直しをする。また、支柱を入れて補強する。

- ウ 積雪があった場合は、早めに雪下ろしを行う。
- エ 加温施設で積雪のあった場合は、ハウス内の設定温度を上げ、内カーテンを開いて、屋根上の雪の滑落を促す。
- オ 連棟ハウスで雪下ろしが困難で、倒壊の恐れがある場合は、谷部のビニルを切って雪を落とす。

2 野菜

(1) 露地野菜

多くの冬春野菜は耐寒性が強く、生育期に寒害を受けることは少ない。しかし、生育が進んだマメ類や結球中の葉菜類は耐寒性が低下し、若い茎葉等が枯死する。いずれの場合も茎葉の温度が -1°C 以下に低下することにより、細胞間隙や細胞質の水分が凍結し、細胞の機械的な破壊により被害を受ける。

露地野菜では防霜ファンのような恒久的な施設の設置は困難なため、被覆資材の利用や耕種的な対策により寒害防止を図る。

ア 被覆法

稲わら(エンドウなど)や不織布(葉菜類)等のべたがけ資材で被覆し、放射冷却による葉温の低下を防ぐ。

イ 耕種的予防法

- 窒素過多になると、軽い霜害でも腐敗が助長されるので、一度に多量の追肥を行なわない。
- 土壌水分が多いと耐寒性が低下するので、乾燥気味に管理する。
- ソラマメ、エンドウなどは株元に土寄せし、不定芽を保護する。
- ハクサイは8分程度結球すれば、外葉で包む。
- 凍霜害によって茎葉の一部が枯死すると、腐敗性の病害が多発するので薬剤を散布する。

(2) 施設野菜

果菜類の栽培が多いが、開花期から幼果期は耐寒性が低く、不受精や奇形果などの障害を生じやすい。また、低温遭遇は心止まりなどの生理障害を生じる場合が多い。

ア 無加温ハウス

寒波の襲来に備え、内張りやトンネル被覆等により熱の損失を防ぐ。すきま風で熱が逃げないように、出入口やビニルの継ぎ目、破損か所の点検補修を行う。

保温だけで対応できない場合は、一時的に家庭用暖房機等を利用するが、ガス障害や火災の発生する恐れもあるので、使用時には完全燃焼等に注意する。

積雪に備え内側から支柱等でハウスを補強するとともに、積雪時には早めに雪下ろしをし、施設被害を防ぐ。

イ 加温ハウス

暖房機により加温するので、比較的被害を受けにくいですが、暖房機の点検や燃料残量の確認を行い寒波襲来に備えるとともに、無加温ハウスに準じて保温や施設被害の防止に努める。

降雪時には設定温度を上げ、内カーテンを開いて屋根上の雪の滑落を促進する。

3 花 き

冬季の低温・積雪シーズンを迎えた花き類では生育・開花不良や施設被害の発生が懸念されるので、次の対策を講じておく。

(1) 温度管理

ア キクは、高温性品種では、電照打ち切り10日前から夜温を15℃とし、その後7日間は18℃、以後2週間は15℃として完全に花芽分化させる。

中低温性品種では、電照打ち切り7日前から20日後まで夜温を10～12℃とし、花芽分化後は8～10℃とする。

イ バラは、品種によって冬季夜温に対する生育反応が異なるので、栽培品種に適した夜温を設定する。

ウ ユリの花芽分化前後(草丈 10～15cm)の0℃以下の低温や急激な温度変化は、形態異常やブラインドの発生原因となるので、適温管理に努める。また、つぼみが発達する段階(1～3cm のところ)の低温によって、つぼみがしおれて開花しないブラスチングが発生することもあるため、適温管理に努める。スカシユリは昼夜の温度較差が10℃以下になるように管理する。

エ 無加温施設栽培では内張りをして二重被覆にするとともに、温度が下がりそうな場合はトンネル被覆も行う。特に寒い夜はコモがけする。

(2) 施設対策

ア 事前対応

○パイプの腐食か所の取り替え・塗装・継ぎ手の締め直しを行う。

○ビニルのたるみ・押さえバンド・補強材の締め直しを行う。

○パイプハウスは筋交い又は支柱を設置し補強する。

○冬季使用しないハウスのビニル被覆は除去する。

イ 積雪時の対応

○積雪時は早めに雪下ろしを行う。

○加温設備のある場合は、内カーテンを展張しない状態で暖房し、屋根上の雪の滑落を促す。

○無加温ハウスは石油ストーブを持ち込んで暖房するが、この場合も内カーテンを展張しない状態で行い、屋根上の雪の滑落を促す。

○連棟ハウスで、雪下ろしが難しく倒壊の恐れがある場合は、谷部のビニルを切って雪を落とす。

○ハウスとハウスの間に落ちた雪は、随時除去する。

(3) 樹体の保護

ア 積雪の多いことが予想される場合には、花木枝物等で樹高の高いものは枝裂けを防ぐため事前に支柱を立てて結束する。

イ 積雪があった場合は、早めに雪はらいを行う。

ウ 季節風の強い所では、防風ネットを設置する。

4 畜産

夜間・早朝を中心に冷え込みが厳しくなるので、畜舎を保温するため、密閉された状態になりやすい。その際、畜舎内の環境は換気不足も影響し、ふん尿やこぼれ水等で湿度が上昇するとともに、ふん尿から発生するアンモニアなど有害ガスの濃度が高くなる傾向にある。そこで、畜舎内環境が悪化し障害が発生する要因を少なくするため、次の点に注意する。

(1) 畜舎内環境改善

- ア ふん尿や汚れた敷料は、こまめに取り除き、畜舎内に湿った空気や有害ガスが滞留する時間を少なくする。
- イ 飲水等に使用する給水槽、給水器からのこぼれ水をなくし、床面の乾燥に努める。
- ウ 暖かい昼間には、十分な換気を行って、湿気やガスを除去する。
- エ 舎内の清掃は早めに行い、塵や埃を除去する。
- オ 各種疾病の原因となる細菌・ウイルス等をなくすため、定期的に消毒する。
- カ 冬期は呼吸器疾患に罹りやすいので、ワクチン接種などの予防を徹底する。

(2) 施設、器具点検

- ア 急激に気温低下(0℃以下)すると、畜舎の給水施設が破裂する恐れがあるので水道管を断熱材等で覆う。また、水施設の見回り点検を行う。
- イ 幼畜を保温する場合には保温器具を利用するが、かなりの熱が発生することがあるため、燃えやすい物を周囲に置かないように十分注意する。